

# 第3章 近代の阿久比

## ■ 第1節 明治維新と阿久比

### ● 愛知県と阿久比村

国内統一を達成した明治新政府にとって最も重要な課題は、富国強兵・殖産工業の政策によって欧米諸国に対抗できる強力な中央集権国家を確立することでした。

その第一歩として新政府は版籍奉還を実施し、尾張に名古屋・犬山の2藩、三河に豊橋・岡崎・西尾・拳母などの10藩が置かれました。さらに、1871年（明治4年）、全国を統一的に支配するために行われた廃藩置県の結果、知多郡を除く尾張が愛知県となり、三河と知多郡が額田県となりました。知多郡は、尾張の他地方と違って、三河地方と一緒にまとめられたわけです。翌1872年（明治5年）には、額田県と愛知県が合併して現在の愛知県ができました。

富国強兵と殖産興業を軸にした中央集権国家を建設するには、それにあわせた地方組織の確立も必要になっていました。

そこで、1884年（明治17年）に郡区町村を設置しました。全国で町村合併が盛んに行われましたが、阿久比では逆に12の村に分割しました。さらに、憲法制定に合わせて地方制度の整備を図るために、1888年（明治21年）に「市制・町村制」が施行されました。愛知県では、市町村制を受けて町村合併が進められ、知多郡でも、89町村が64町村に統合されました。阿久比では、12か村が「阿久比村」「東阿久比村」「上阿久比村」の3か村にまとめられました。

このころの阿久比各村の合併分離は複雑な経過をたどっています。江戸時代から「阿久比谷16か村」といわれ、阿久比川の両側の山すそに点々と集落を造っていた各村は、簡単には合併とならなかったようです。2村が合併してできた椋岡村・矢高村・卯坂村・植大村については、いずれももとの村の頭文字を合わせたのですが、どちらの字を先にするかでもめたようです。

その後、1906年（明治39年）、県下一斉に大規模な町村合併が実施されたとき、阿久比でも3村が合併して「阿久比村」となりました。そして、この年行われた選挙によって当選した18人の村会議員による投票で、初代村長には、池田竹三郎が選ばれました。

### ● 人口・戸数の推移

人口や戸数が正確にわかるようになるのは、1920年（大正9年）に実施された第1回国勢調査からですが、知多郡統計で明治の末期からおおよその数がわかります。阿久比村の人口は、1905年（明治38年）には8,374人、1935年（昭和10年）には8,377人で、この30年間にわずかしか増加していません。自然増がもう少しであったので、相当数が村外へ流出したものと思われます。大正からは女性の方がだいぶ多くなっていますが、これは農村不況で都市への男子の流出が多くなったことと考えられます。昭和22年に人口が一気に増えたのは、外地からの復員とベビーブームによるものです。1920年（大正9年）の大字別の人口は図のとおりです。現在の分布とはだいぶ違い、村全体に平均的に散らばっていました。これは農業中心の暮らしだったために、耕地の広がりとの関連が強かったためと思われます。

一方戸数をみると、人口と同じように明治から昭和まで大きな変化はありません。江戸時代、文化年



大正9年の大字別人口

間の『尾張徇行記』に記されている 1,594 戸と比べてもほとんど増えておらず、100 年以上にわたって変化がなかったことに驚かされます。

日本全体では、明治以降人口が急激に増えているのに、阿久比ではなぜ増えなかつたのでしょうか。最大の理由は、農業中心の産業構造によるものでした。次男・3 男は村に残って農業をすることはできないため、半田や名古屋周辺へと出ていきました。また、中等教育以上を受けた者も、農業に従事せず阿久比から外へ出ていきました。

阿久比村の戸数と人口の推移

区分	戸 数	人口		
		男	女	計
明治38(1905)	1,590	4,142	4,232	8,374
43(1910)	1,487	3,896	3,967	7,863
大正 4 (1915)	1,526	4,025	4,081	8,106
9 (1920)	1,639	3,760	4,016	7,776
14 (1925)	1,420	3,698	4,033	7,731
昭和 5 (1930)	1,621	3,995	4,158	8,153
10(1935)	1,627	3,951	4,426	8,377
15(1940)	1,625	4,103	4,488	8,591
22(1947)	2,028	5,288	5,761	11,049

『知多郡統計概観』(国勢調査)

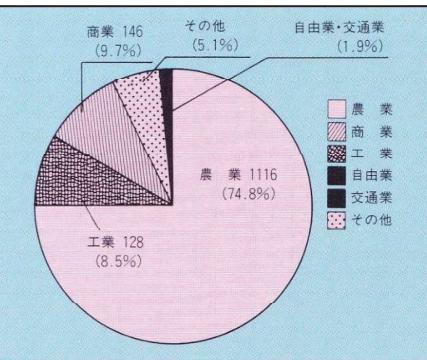
## ■ 第2節 産業の発達

### ● 農家戸数と耕地面積

阿久比は、知多半島の中央部に位置し、阿久比川・矢勝川沿いの低地に水田が、丘陵地には畑が開かれて、農業を中心に発展してきました。

明治末期の農家戸数は 1,500 戸ほどで、全戸数に占める割合は 90% 以上にも達していて、いかに当時の人々が農業を中心に生活を営んでいたかがわかります。しかし、1914 年（大正 3 年）には、200 戸あまりも減少しています。これは商工業の発達に伴う職業の多様化の波が阿久比にも及んできたからでしょう。農家戸数の減少は、1935 年（昭和 10 年）までわずかでしたが、兼業農家は大正 3 年の 19% から 41% へと大幅に増えています。生活の向上のために、商工業にたずさわる人が出てきたことと、不況のために都会から農村に戻って農業を兼業する人が増えたためと思われます。

耕地面積は、明治末期で水田 800 町歩（約 800ha）、畑 250 町歩（約 250ha）ほどでした。大正、昭和と時代がたつにつれて、わずかずつ耕地の増加がみられました。特に大正時代には、ため池の新築や栽培作物の変化とあいまって山林・原野の開発が進められたからです。その結果昭和 10 年には、水田 850 町歩（約 850ha）、畑 300 町歩（約 300ha）になりました。



業態別戸数 (昭和 10 年 12 月 31 日)

### ● 米作り

水の乏しく平地の少ない知多半島の中で、米といえば「阿久比米」といわれるほど名が知られていました。これは、村の中央を半島最大の阿久比川が流れ、川に沿って水田が開けていることから、米どころとしてこの地方に知られるようになったのでしょう。また、醸造原料として需要地の半田が近かったことも、阿久比米に有利にはたらいたのでしょう。

阿久比の農業は、圧倒的に米作中心でした。明治から昭和にかけて、常に作付面積の 75% 前後を占めていました。明治 42 年から、大正 3 年、昭和 10 年へと作付面積はほとんど変わりませんが、収穫高は約 1 万 7,000 石（約 2,400t）約 1.2 倍になりました。

大正の初めころから、共同苗代や種もみの塩水選（比重の違いを利用して重くよい種もみを選別する方法）が広まり、優良品種の導入なども進められました。これらは個々の農家の努力もありましたが、農会や農事実行組合などの指導や種子・苗・肥料の共同購入などによってなされていました。生産された米は、自給される以外は近隣町村の消費や醸造用に販売されました。それも多くは共同出荷・共同販売をしていました。

農家の米作りは、早春に短冊型の苗代づくり・もみまきに始まり、梅雨時の田植え、夏の草取り、秋の収穫へと続きます。さらに天日干し・脱穀・もみすり・俵詰め、産米検査と休む暇なく作業が続きました。もちろん、米作りと並行して、蚕の世話や畠での野菜作りも行うのですから、たいへんな重労働だったのです。

## ● 商品作物の導入

耕地拡大や栽培技術の向上にしても限界があり、米だけでは収入には限りがあります。商品作物を導入して、少しでも収入を上げようとする努力は昔からありましたが、いずれも小規模でした。

明治以降は、政府や県の指導もあって、さまざまな作物が栽培されていました。

[果樹] 果樹栽培は、自家消費のために庭先に植えられていたものが、明治の後半から農家の現金収入の一つとして広まっていきました。かんきつ類をはじめ、ブドウ・カキ・ナシ・ウメなどが植えられました。その中では温州ミカンが最も多く栽培されました。

温州ミカンは知多半島全域で盛んに栽培され、昭和10年代には県下でも有数の産地になっていました。阿久比は半島内では、栽培面積で3%、平均収量で8%でした。出荷は、かんきつ組合を通しての共同出荷がとられました。

そのほか、カキやウメなどの栽培も増えましたが、地元で消費する以外は、近隣町村へわずかに出荷されるくらいで、特産地となるまでのものはありませんでした。

[そ菜] そ菜類の栽培は農家の自給用から発展し、商品作物として栽培されました。本町ではいずれも生産量は少なく、特産物といえるものは生まれませんでした。

イモ類の生産高

		明治43年	大正3年	昭和2年
甘しょ	数量	59,960貫	100,000貫	203,400貫
	価格	2,998円	3,000円	20,340円
馬鈴しょ	数量	24,030貫	24,100貫	105,500貫
	価格	961円	1,330円	16,880円

『知多郡統計概観』・阿久比村事務報告

鶏の飼育羽数

		明治43年	大正3年	昭和10年
親 鶏		1,185羽	750羽	10,066羽
雛		1,990羽	850羽	2,195羽
価 格		1,198円	695円	7,668円

『知多郡統計概観』『愛知県統計書』

そのほか、豆類や菜種をはじめ、多くのそ菜が作られましたが、個々の量も少なく、輸送の便にも恵まれておらず、近隣地域に出荷される程度のものでした。

[養鶏・畜産] 養鶏は手間もかかりず、簡素な鶏舎で十分であり、農家の副業としては適していました。鶏糞は自給肥料として利用できるため、多くの農家で飼われていました。1個2銭で売れる鶏卵は、農家にとって貴重な収入源でした。(明治末期には、米1升約20銭でした。) 昭和に入って飼育羽数が増え、生産価格も昭和2年には、2万円を超みました。牛馬は、役用として飼育されていましたが、その数は少なく一部に限られていたようです。

[養蚕] 江戸末期の開国以来、生糸はわが国の輸出1位を続けていました。農家にとっては重要な収入源として養蚕は広まっていきました。米作りに適さない丘陵地が多い阿久比では、丘陵地の斜面を利用して、明治中期以降本格的に広まり、大正から昭和初期にかけては全盛期を迎え、1935年(昭和10年)には桑畠が117町歩になりました。養蚕農家比率も1909年(明治42年)には農家数の約13%であったのが、大正3年には約38%に増加しました。そして、町内各地区に養蚕実行組合が作られ、繭の共同出荷・共同販売が行われました。

しかし、太平洋戦争が始まると、食糧増産のために桑畑はイモ畑に変わり、盛況だった養蚕業も衰えていきました。

### ● 農業とかんがい

知多半島は、丘陵性の半島で大きな河川がなく、中小の川はあっても降った雨は一気に海に流出してしまうため、昔からたびたび干害に悩まされてきました。阿久比でも、1883年（明治16年）、1924年（大正13年）1933年（昭和8年）に干ばつがありました。干ばつのときは、人々は神社に集まって米や酒などを供えて雨乞いをしました。そのために、集落によっては雨乞費あまごいひが徴集されることもありました。当時の人々は、ただ神様にすがるほかなかったのでしょうか。

農家の人々は水不足を克服するために、明治以前からため池を造って利用してきました。前にもふれた通り、江戸時代の記録によると、阿久比には108ほどのため池が記されています。明治以降も未利用地や山林の耕地化、水田化、あるいは干害対策のために、ため池の改修や新築が行われました。

1918年（大正7年）の「溜池台帳」によると、公共のものが100個、私有のものが1,078個、総数1,178個があげられています。しかし、その大部分は1反（10a）未満の小さなものでした。1町歩（1ha）以上のものは、矢高の櫟池をはじめとして八竈池・焼山池など18個で、ほとんどは各村（地区）所有のものでした。

ため池の維持管理も大事な仕事でした。土砂を取り去り、古くなった堤や水門の修理などもたびたび行われました。

### ● 水をめぐる争い

阿久比川沿いの低湿地では、川の水をかんがいに利用していました。ただ、限りある水を利用するため、水をめぐる争いが絶えませんでした。植・大古根地区では、半田の岩滑村との間を流れる矢勝川の水の利用をめぐって、江戸時代からいざこざが続き、明治になってからも話し合いがもたれ、取り決めをしていました。

また、矢勝川は川底が両岸の土地より高い天井川となっているため、低湿地は水はけが悪く、排水に苦労していました。そのため、植・大古根と岩滑との間で、排水をめぐっての争いもたびたび起こりました。利用済みの水や余剰水を悪水といい、これを流す水路を悪水路といいました。矢勝川沿いの悪水路が、川の下を通って両方の地区に入り混じって複雑に敷設されていたことも争いの原因でした。排水する方にとっては大量の水を太い管で一気に流したいし、悪水を受ける方は少量で済ませたいと考えるのは当然のことです。そこで壠樋いりひ（取水口や配水管）の改修工事は、両方の利害関係を調整しながら問題が起こらないように共同で行うのが普通でした。

### ● 不況と農村

1927年（昭和2年）の金融恐慌後、農産物の価格は下降したままでした。それに加えて1929年（昭



白沢大池修繕工事（昭和17年）

#### 主なかんがい用ため池

（大正7年7月1日）単位：m<sup>2</sup>

字名	所在地	面積	所有者	池名
矢高	櫟1	34,500	矢高組持	櫟池
植大	八竈15	30,712	山方殖産	八竈池
卯坂	焼山47	30,009	卯坂坂部組	焼山池
草木	上芳池1	28,300	大字草木	下芳池
阿久比	親田6	26,800	大字阿久比持	親田池
白沢	人池1	24,623	大字白沢	白沢人池
宮津	山田44	21,100	大字宮津持	山田池
草木	上大池16	19,012	大字草木	草木池
植大	西孤谷9	18,300	植村組持	西孤谷池
宮津	小廻間24	16,701	大字宮津持	小廻間池
草木	平井林1	13,520	大字草木	平井林池
宮津	屋郷1	12,022	大字宮津持	屋郷池
板山	長根19	12,000	大字板山持	下長根池
卯坂	下同志鐘11	11,215	大字卯坂持	下ノ池
草木	洲原1	11,200	大字草木	牛作池
板山	東高根2	11,100	大字板山	上長根池
植大	大茨谷13	10,502	大古根組持	鎗場池
植大	折戸19	10,419	大古根組持	折戸池

和4年)の世界恐慌は、日本の農家を直撃し農村は大不況になりました。農業所得は減少し、兼業収入を加えても家計を維持することができない農家が激増しました。さらに、都市部で続出した失業者の一部が帰農したため、農民の生活は惨憺たる状況になりました。

純農村地域で、商品経済化がゆるやかであった阿久比では、東北地方にみられるような飢餓や身売りではなく、全国的に起こった小作争議もほとんどありませんでした。しかし、それまでも決して豊かとはいえないかったので、この不況は生活を苦しくしました。

## ● 商業

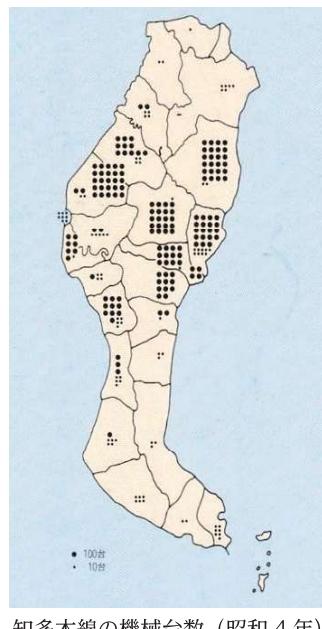
農業を中心にして、小さな集落に分かれていた阿久比は、商業はふるわず、狭い地域を対象にした小さな店が、各集落に散在していました。明治期の実態を知る資料がないので、はっきりしたことはわからいませんが、明治末期には商家が241戸あったと伝えられています。ほとんどが雑貨や飲食物を扱う小さなもので、比較的大きい店は10数軒だけで、宮津にかたまっていたようです。

宮津は商店が多く、集落を南北に通じる道の両側には、木綿問屋、呉服屋、酒屋、雑貨屋などがならび、近くの村から多くの人出があったといわれています。売上で最も多かったのは肥料でした。多くの農民は前借りで肥料を買い、秋の収穫から支払いをしました。なかには借金を返せなくて、田畠を手放すこともあります。こうして商人の中には、大きな力を持つ者も出てきました。各集落の商店は、小さな雑貨屋・よろず屋的なものが多く、宮津の商店や問屋から品物を仕入れて自分の店で売ったり、集落内に行商に行ったりして商売をしていました。

## ● 工業

農業が中心の阿久比では、工業といえるものはごくわずかでした。江戸時代には、宮津に造り酒屋が数件あり、あとは農家で機織りが行われていたぐらいでした。明治になると、酒造りから味噌醤油造りに変わるところもありましたが、宮津の醸造業はその後も続けられました。横松には、江戸時代から大工職が多く、半田や三河に出かけて仕事をしていました。特に宮大工としての技術は高く評価されていました。明治以降の最大の変化は、綿織物業の発展です。初めは農家が仲買人から綿花を買い、布を紡ぐ賃織りをしていました。

明治10年代になると、水車紡績(ガラ紡)が始まり、さらに機械紡績へと切り替わり、生産が大幅に伸びていきました。1897年(明治30年)ころになると、半田には知多紡績株式会社ができるなど、郡内にも大きな工場ができてきました。阿久比でも中小の工場ができ、機械紡績が盛んになってきました。手織りものは、農家の副業としてずいぶん後まで行われていました。明治末には、従業員10



のこぎり屋根の織物工場

織布生産高知多郡の上位5町村

(明治42年)

	生産地	台数	生産高(円)	職工数		
				男	女	計
織	根豆志村	462	941,592	20	233	253
	成岩町	371	578,400	14	138	152
	岡田町	270	561,900	17	156	173
	阿久比村	289	492,034	8	102	110
	亀崎町	661	413,519	27	306	333
	知多郡	3,721	6,076,061	172	1,815	1,987
手織	八幡村	267	478,795		267	267
	亀崎町	564	226,949		564	564
	阿久比村	258	221,372		258	258
	東浦村	278	186,320		278	278
	鬼崎村	144	176,064		144	144
	知多郡	5,471	2,652,810		5,471	5,471

『愛知県地誌』

人以上の工場は25戸でしたが、すべて織布工場でした。最も古いものは、明治36年創業の宮津の伊志屋織布工場で、従業員の多いのは、草木の○織布工場でした。明治末の織布生産高をみると、機械織は郡内4位であり、職工1人当たりの生産高は1位でした。また、手織りも3位であり家内工業の割合が高いこともわかります。

このころ知多半島は、織物生産では県内で第1位を占めるほど盛んでした。その後も織機台数は増え、昭和の初めには約2,000台となりました。1931年（昭和6年）に現在の名鉄河和線が敷かれると、よその町からも働きに来るようになりました。

## ■ 第3節 交通・通信の発達

### ● 道路交通

明治の初めまで、よそへ行くとき人々は自分の足で歩くか馬やかごに乗るしかありませんでした。貨物の運搬も馬の背を利用するくらいでした。板車という粗末な木造りの荷車もありましたが、道も悪く、川にはほとんど橋がかかっていなかったので、その利用はごく一部でしかありませんでした。

明治になると少しずつではありますが、橋をかけたり道路の改良が進められて、荷車の利用が増えてきました。明治10年過ぎには、改良荷車という鉄輪をはめた荷車が造られ、馬の利用がなくなっていました。明治20年過ぎには、牛馬車も造られるようになりましたが、阿久比ではありませんでした。

阿久比では、鉄道も海もなく、半田街道を別にすれば、集落間を結ぶ江戸時代からの狭い道しかありませんでした。その中でも、草木から岡田村への道、椋岡・植大から大野への道、板山から有脇・乙川への道、宮津・萩から乙川への道などは、道幅1間（約1.8m）以下でしたが重要な道でした。

明治も後半になって人や物の往来が増えると、道路改修の要望が高まってきた。しかし、国も県も資金不足で思うように工事は進みませんでした。そこで、道路用地や建設費用の一部を地元が負担することで、少しずつではありますが、改修が進められてきました。

旅客輸送では、人力車は1870年（明治3年）に東京で発明されて、次第に全国に広りましたが、



昔の道路の様子（卯坂字城街道）

阿久比村に入ったのはだいぶ遅れ、数も少なかったようです。自転車がこの地域に入ってきたのは、明治30年代と思われます。阿久比は周辺町村に比べ、陸上輸送が遅れていたため、自転車はずいぶん増えました。このころの自転車は、鉄製の車輪で乗りごこちはよくありませんでした。ゴム製のタイヤに替わるのは大正末期です。

大正になると、乗合馬車、ついで乗合自動車が走り出しました。阿久比では、半田一大野間の乗合自動車がわずかに村内を走っていただけで、あまり利用されていませんでした。

明治末期から大正期にかけての車両数の変化

年	町村名	客馬車	人力車	自転車	荷積牛馬車	大車	小車
明治41年	阿久比村	0	6	14	21	116	174
	半田町	0	46	116	20	89	32
	亀崎町	0	14	85	20	224	496
	東浦村	0	7	20	10	219	186
	八幡村	0	9	7	4	203	256
	岡田町	0	7	8	10	29	23
	大野町	0	8	20	—	—	—
知多郡計		7	325	579	250	2667	6095
大正7年	阿久比村	0	4	391	12	147	204
	半田町	0	4	635	44	148	369
	亀崎町	0	12	444	32	224	422
	東浦村	0	5	414	21	184	142
	八幡村	0	5	363	9	259	315
	岡田町	0	4	187	28	43	38
	大野町	0	4	119	1	34	156
知多郡計		15	186	7425	375	3520	7436

『知多郡統計概観』

## ● 知多鉄道の開通

知多半島と名古屋を結ぶ交通機関としては国鉄武豊線が1886年（明治19年）に、愛知電鉄の常滑線が1910年（明治43年）に開通しました。しかし、半島中央部の阿久比には鉄道がなく不便でした。半田地域から名古屋へ出るのに武豊線は乗り換えが必要なうえ、本数も少ないなど不便であり、名古屋と結ぶ私鉄を造ろうという動きが、半田を中心に大正の初めころからありました。初めは常滑線の横須賀と半田を結ぶ計画が立てられましたが、不景気のため計画は中止されました。その後、大正末になって、知多商工会議所が中心になって運動が進められ、太田川一河和間28kmの敷設許可を得て、昭和2年に資本金300万円の知多電気鉄道株式会社を設立しました。工事は1929年（昭和4年）から始められ、1931年（昭和6年）太田川一成岩間が完成しました。その後、1932年（昭和7年）に

河和口まで、1935年（昭和10年）には河和までの全線が開通しました。村内のどこに路線を通すかについて、丘陵東部の宮津を通るものと、西部の集落沿いの2通りが考えられました。宮津地区は特に熱心に誘致運動をしましたが、知多鉄道側では、名古屋と半田地区を結ぶ高速鉄道を意図していたため、結局は阿久比川沿いの現在位置に、ほぼ一直線になりました。そして、白沢・坂部・椋岡・植大の4つの駅が造られ、宮津地区は、駅からやや遠くなりました。

利用客は年々増加し、名古屋や半田方面への通勤に利用する人が増えてきました。

年月	経過
大正14年12月	申請書提出 発起人総代 小栗三郎 (知多商工会議所会頭)
15年11月	敷設認可
昭和2年10月	中墾銀行で会社設立総会
4年12月	住吉神社で起工式
6年4月	第1期線（太田川・成岩間）竣工・開通式
7年7月	第2期線（成岩・河和口間）竣工
10年8月	第3期線（河和口・河和間）竣工

知多鉄道敷設までの経過

半田方面			名古屋方面		
時間	乗り	降り	時間	乗り	降り
時分	人	人	時分	人	人
前 6.41	5	1	前 5.40	97	0
7.11	16	5	6.45	43	8
8.13	9	9	7.19	18	7
9.13	1	9	8.24	12	0
10.13	2	3	9.24	1	11
11.13	6	7	11.24	4	10
后 0.13	8	1	后 0.24	3	2
1.11	7	1	1.24	3	2
2.13	9	1	2.24	6	7
3.13	4	5	3.24	1	13
4.13	9	7	4.24	4	26
5.13	21	18	5.24	11	29
5.27	3	20	6.24	1	10
6.13	5	29	7.24	1	19
7.13	8	15	8.24	1	4
8.01	1	24	9.36	1	7
8.13	2	8			
9.38	2	15			
11.08	2	4			
計	120	182	計	207	155

坂部停留所 上り・下り 乗降者人員調査  
(昭和16年11月4日曇天) (坂部区有文書)



阿久比川にかかる橋の竣工(昭和6年)

## ● 郵便局の開局

江戸時代の通信は、利用者が飛脚屋に書簡や小荷物を委託して相手に届けていましたが、時間がかかり安全とはいえないませんでした。明治政府は、この不便を解消するために、1871年（明治4年）に郵便制度を設けました。

知多地方では、1872年（明治5年）に亀崎・横須賀・大野に郵便局が開設され、順次そのほかの町村に開設されました。阿久比ではずっと遅れて、1902年（明治35年）に宮津郵便受取所が開設されました。そして、1905年（明治38年）には宮津郵便局、1909年（明治42年）には阿久比郵便局と名前を変えてきましたが、集配をせずに窓口業務だけだったので、郵便・小包とも1日に2、3通の利用しかありませんでした。1908年（明治41年）に電報受付業務を始めると、通常郵便よりも盛んに利用されました。昭和に入るまで、電報以外の郵便物は亀崎局と岡田局から配達されていました。いずれにしても、配達に時間がかかり、誤配も多くて不便でした。昭和3年になって、阿久比郵便局が集配業務を始めると、利用は飛躍的に増えました。3年度の普通郵便の引き受け約30万通、配達約50万通にのぼりました。1万人に満



昔の阿久比郵便局（宮津）